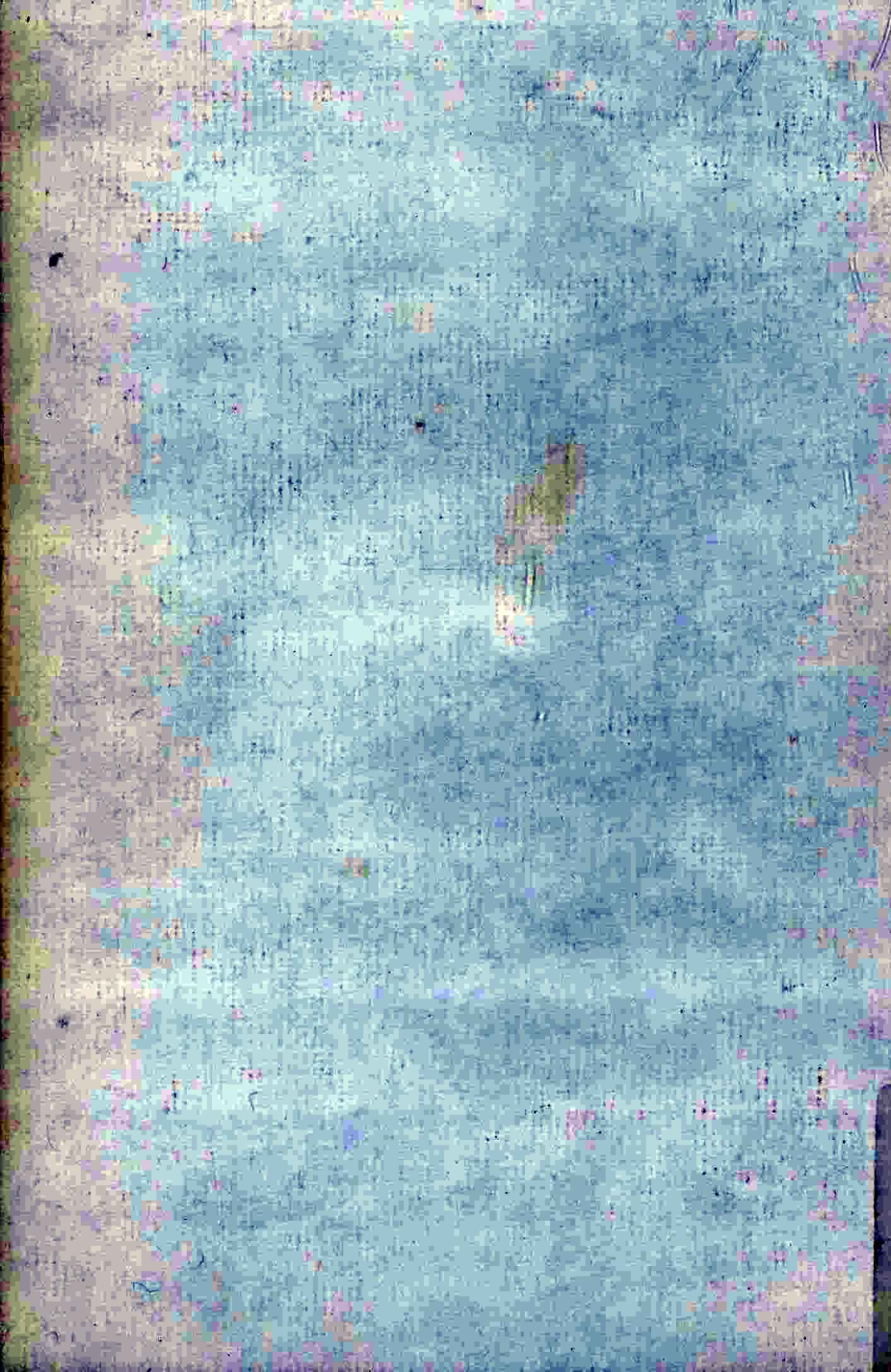
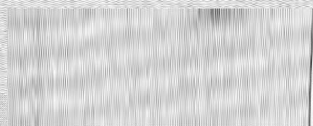




# サングラスの少女

北山修



中央公論社

北 山 修 きたやま・おさむ  
昭和21年、淡路島に生まれる。  
著書は、『戦争を知らない子供たち』  
『さすらいびとの子守唄』『止まらない  
回転木馬』『人形遊び』などがある。

サングラスの少女

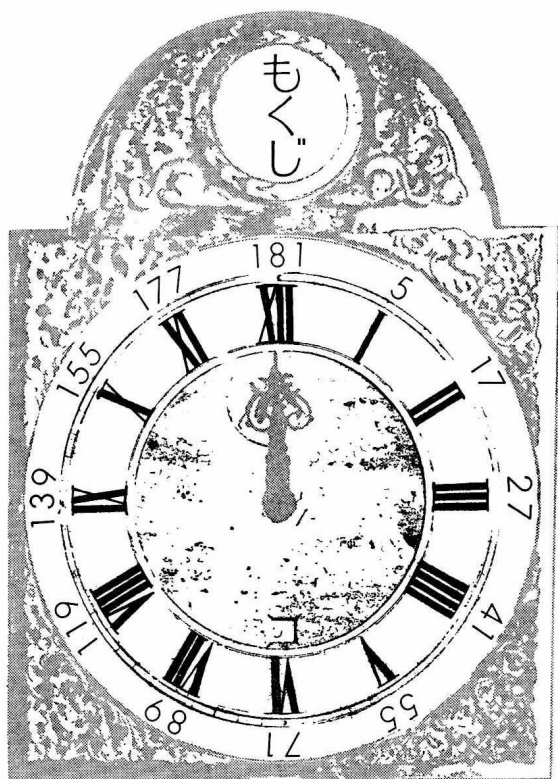
検印廃止 ©1979 定価 780 円

昭和54年 6 月 1 日初版印刷

昭和54年 6 月10日初版発行

著 者 北 山 修 発行者 高 梨 茂 印 刷 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋 2-8-7 振替東京 2-34

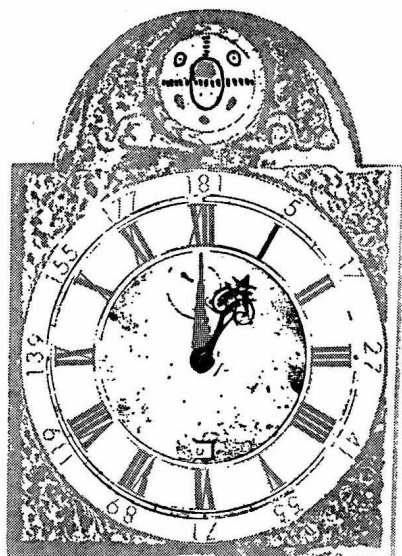


表紙・挿画  
自切俳人

サン  
グ  
ラ  
ス  
の  
少  
女



# I





アハハハ。

私は声をたてて笑ってしまいました。すると、急に部屋の扉がひらいてハハの顔がのぞきます。

「もしもし、愛子さん、どうしたの？」

私がいつものように、「べつに」と、あいそなく答えますと、ハハは「そっ」とそっけなくうなずくのです。それだけの会話であっというまに、あっけなく扉がしまります。そこで私は「あっそう」と、ぼつりひとこと。

そう、私は受験のための勉強をしているんですよ。小学校の試験なのか、中学の受験なのか、高校に入る試験なのか、大学の入試なのか、就職試験なのか、覚えていません。でも、試験はずいぶん先のこと、私にとって、さっきのこと。

季節は冬。今は夜。明日は正月。来年まであとわずか。

電気ストーブがチンチンと緊張した音をたてています。チンチン、チンチン。

アハハハ。

笑ってごまかそうとしても何もおこりません。「困ったな、弱ってしまおうわ。このマンガほんとうにわかりにくいんですもの」と、こらえきれなくなった私は、ゴホンゴホンと咳こみながらマンガのご本を壁に投げつけてしまいました。おっと、思いがけずドスンと大きな音。ドスン。

今度はチチが扉をひらいて顔を出します。

「どうしたんだ。おい、とんでもないことを考えてるんじゃないだろうな。どうもおかしいぞ」

私はすぐに「とんでもないわ。さっきの音はね、引き出しをしめたひょうしに指をはさんでしまったのよ。おお痛い、アチチチ。それでね、あわてたとたんに本が

落ちたらしいの。どうもでした」と答えます。そして、顔をしかめて指を口にくわえ、もう一度アチチチと言ってから、「ほんとうにこの机どうしようもないのよ。新しいのがどうしてもほしいんだ」と、うらめしそうにつぶやきました。

するとチチは「そっ、どうもね」と、いつものように納得して扉をしめます。この『どうも』がどうもわからない。

思いきって、きのうテニスをしたときにつくってしまった血豆を前歯でつぶしてみたら、教科書にぽつりと赤いものがおちました。トランジスターラジオでアナウンサーが読みあげる十大ニュースは去年とおんなじ。

「つままないったらありゃしない」

ラジオのツマミに指をのばして音量をさげました。『つままない』は私の口ぐせ。トントン。奇妙な物音がします。私のすわっている机の前に窓があって、その窓をトントンとたたく音がするのです。

「こんなに夜遅く、いったいどなたですの」と私はたずねました。

すると、「なに言っただ。まだ昼だべさ」と、どこかで聞いたことのある声。  
が、誰の声だかほとんどわかりません。

トントントン。トントントン。

すぐに体をのばして窓をひらいてみましたが、誰もいません。ところが驚いたことに窓の外はほんとうに昼間のようなお天気で、明るい太陽の光が道路にびよんぴよんはねかえっています。実にひよんなことになりました。

なんだか得をしたような気分。夏休みを突然もらったような気分です。さっきまで頭のなかにあった複雑な気分はふっとんでしまい、体中がめらめらと燃えあがる炎のように熱くなってきました。

「ちょっとお外へ出てみましょう」と、私は部屋から廊下に出て、そして玄関へと歩いてゆきました。しのび足。

誰にも気づかれていないようです。ハハはラジオで『合唱』を、チチはテレビで『歌合戦』を、という具合なので、廊下には数百人も歌声が流れています。それがちょうどクライマックスに達しているので、私の足音なんか聞こえるわけがありません。

玄関の戸をあけると、冷たい風が吹きこんできて、外は寒い寒い真冬の夜。空にはほのかに星の光数万個。どうやら、お昼になったのは私の部屋の窓だけのようにです。

靴をもって自分の部屋まで戻ってくると、相変わらず私の部屋の窓のむこうでは明るい太陽の光がふりそそいで、カンカン照りの様子です。ジーンをはいた少年や、タンクトップから小麦色の肌をのぞかせた女の人が、窓の外を通りすぎてゆきました。ピンク色の水筒をかけた女の子たちも虫とり網をもってかけてゆきます。「こっちは夜だっていうのに、窓の外だけ昼間だなんて、おかしいわ。でも、面白

いな。絵本みたいな、テレビのような、お芝居ね」と、私は歌うように言ってみたんです。すると、それを聞いたハハが「お勉強してるの？」と、壁のむこうで叫びます。

「ママだって窓の外がお昼だと知ったら喜ぶかもしれないわ。でも言わないほうがいいわね。こんなものに気持を動かされていると、叱られちゃうかもしれないわね」と、ひとりごとを言いながら歩いていると、ストーブのそばでねていた三毛犬のジョンのしっぽを踏んづけてしまったのです。ジョンはびっくり、キャンキャンキャン。

「静かにしなさい」といくら飼い主が言っても、この神経質な年老いた犬は、私の目の前でテーブルのお茶までひっくりかえしてメチャメチャです。お目こぼしなんてとんでもありません。

「どうしたの」とハハの声。ちょっと困ったことになりました。そうしたくはあり

ませんが、ここはひとまず窓をしめねばならないようです。

そのとき、またさっきの声。「まだ、まだ、窓をしめるのはまだだ」

としよりか子供か、どちらなんだろうと考えてみても、さっぱりわけのわからない声なんです。でも、どこかで聞いたことのある、どこにでもあるような声。どこがどうってことはないのですが、どこかがどうかなくなっています。

「不思議な声を出すあなた、いったい誰なの？　どうか教えて」

「わしか、わしはマツピル魔じゃ。これでどうかな」

「それで、顔と胴くらい見せてくださいな」と、私は窓にむかってたのみました。

「マツピラじゃ、これでどうだ」

「好きな音楽は何ですの」

「カッポレじゃ。堂にいったものだ」

「それは、おはやしにあわせて踊るこっけいな踊りね」

「そのとおり、アッパレじゃどう」

こんなに緊張して手に汗をにぎる会話は、今までにしたことがないと言えるでしょう。ジョンも窓にむかって激しくほえています。外から聞こえるおかしな声のおかげでいらいらしているのでしょう、どんなになだめてもなきやみません。それどころか、ジョンは私の机にとびのり、肩をいからせて獲物でもねらっているかのようにはえはじめました。

「何か気にいらないものが外にいるのかしら」。私がジョンのにらみつけているところに目をやると、通りの向かい側で右の前足をあげてすわっている黒猫と目があいました。「まねき猫だわ！」

置き物だろうと思いましたが、すぐに相手は右手をおろしてあくびをひとつ。ジョンのなき声など耳にはいらぬ様子でさっと姿を消しました。

「どうしたんだ」と、今度は壁ごしにチチの声。



ポツポツと鳩時計が夜の十二時を知らせはじめました。机からとびおりたジョンはキャンキャンワンワンと叫びながら部屋中を走りまわっています。

「いそがなくっちゃ」と言う奇妙な声がまた窓からとびこんできて、私の体をひきよせるのです。私はふらふらと窓へ近づいてゆきます。迷いはじめた私の心のなかでは、声にまねかれて窓からとび出そうとしている自分の体をどうするのか、まだきめかねているのです。

「早くおいで、早くおいで」と奇妙な声をするたびに、私の心も次第にその気になつてきます。やがて、もういかなくちゃ、なにがなんでもいかなくちゃ、といった気持ちになり、とうとう体のほうは勉強机の上にとびのります。そして、ひっくりかえりそうになりながら靴をはいた私は、窓の外へ片方の足をふみだしてしまつたんです。

右足だけ外へ出したところでまた考えました。こんなときでも冷静に考える力は